

# 「新しいうつ病論」

高岡 健著



結核、がん、エイズと、これまで時代を象徴する病が登場してきたが、現在、その患者数の増加、病状の広がりから、うつ病はますますその中心にあると言っている。この書は、うつ病を医療面からだけでなく社会面からも分析し、新しい理論と対応策を打ち立て、絶望から「希望の病」へと再生していくための道を模索している。

そもそもなぜ、これほど増加の一途をたどるのか。「ストレス」と答える人は多いが、著者は一歩踏み込みそのストレスの原因を、同じ現象が起きた一九八〇年代の大不況下のアメリカ、イギリスと重ねて説明する。当時レーガンとサッチャーが進めた新自由主義、新保守主義、小さな国家への転換は、個々の自由と引き換えに「自己責任」の名の下の熾烈な競争へ人々を追いつけた。つまりたゆまぬ自己努力の強制の結果、息詰まる抑圧感が生まれ、人々の心を侵しだしたのだ。

## 「希望の病」へ再生の道探る

政策的に追従する日本にも、それが十数年遅れて現れた。今や、仕事も健康も老後も大きな国家という枠組みの保障は消え、勝ち組、負け組に象徴される「個人努力」の結果の二極化へ姿を変えた。

また、医療界もその兆候を見逃さなかった。一九八七年、アメリカでは副作用の少ない抗うつ剤、プロザックが認可される。また同時にうつ病の外にあって「障害」と見なされていたものをうつ病と同じ症状と診断し、枠の中に入れ、概念を広げていく。当然、患者の対象は、大人だけでなく子どもや青年にまで広がり、うつ病はどの世代にも起こりうる「心の風邪」となっていくのだ。

著者はこのようなうつ病の社会認知がある程度評価しつつ、米英のような過酷な競争原理を本質的に解決しないまま、薬だけが市場にあふれ出す流れに、日本もただ身を任すことへ警鐘も鳴らしている。うつ病が自分で自分の生き方を問う病だからこそ、そこに社会を変える希望も力もあると述べるのだ。

この本を読んで、「うつ病になって初めて自分らしさを取り戻した」という、私たちの作業所に通う女性を思い浮かべずにはいられない。評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）